

## 沙漠のオアシス

二〇〇四年六月九日、サウジアラビア、リヤド

リヤドは三月頃から一気に暑くなり灼熱の国になる。

六月にはサウジらしい本格的な熱さが一日中続く。

容赦なく照りつける陽射しを長い間受けるわけには行かないが植木はしばしその懐かしいピリピリとした陽射しを楽しんでいた。

日中の気温は五〇度近くなったが湿気が殆ど無いので不快感は全く無い。

植木の住むファイサリア・レジデンスの窓からも、左手にリヤドの街並みが一望出来た。

ファハド大通りの向かいにはタミミというスーパーがあり、その後ろにはアラブらしい淡い茶褐色の屋根に白壁の街並みが延々と続く。遙か先には大きなモスクの姿がポツンと見える。青空の下に広がる白を基調としたその風景は眩しく

美しい。

左手は西だったから、殆ど毎日が青天のリヤドでは、いつも、この美しい風景の向こうに沈む夕陽が望めた。

ファイサリア・レジデンスは、リヤドの超高級ホテル、アル・ファイサリア・ホテルと広大な芝生の庭を挟んで建てられていた。植木の部屋も慎太郎の部屋と同様、この庭に面していたので、リヤドにしては貴重な青々とした芝をいつも楽しむことが出来た。

まるで沙漠の中に忽然と現れたオアシスのようだった。

右手すぐ脇には、ファイサリア・タワーが聳えていたが、約二七〇メートルも高さがあったので見上げるのは一苦勞だった。

植木は新たに出来たエネルギー関係の国際機関、国際石油ガスフォーラム事務局に勤務するため二二年振りに二〇〇四年三月からサウジアラビアに滞在していた。

これも何かの縁だろうと不思議な気持ちがしていた。もっ

とも、前回はジェツダ、今回はリヤドで、リヤドにはかつて出張で訪れたことがあったとは言え勝手知ったるといっわけではなかった。

また、前回に比べ、格段に治安が悪化していて細心の注意を払って生活しなければならないという点も大きな差だった。

赴任後の四月には内務省交通警察前の爆弾テロ事件が発生し六名が死亡、一五〇名近い負傷者が出た。五月にも紅海岸の工業都市ヤンブー、東部油田地帯の中核都市アルコバールで二八人の民間人がテロにより殺害された。

一連の事件はアルカイダのサウジ支部“沙漠のサソリ”の仕業だった。

アルカイダは当初聖地サウジアラビアを汚すものとしてアメリカ人を狙っていたが、米国がイラクを攻撃してからは米国に加担する国々も攻撃対象としていた。日本もその対象に入っていることは明らかで植木もそれは十分に分かっていた。

植木は、閣僚級の会合である国際石油ガスフォーラムが原油価格の高騰に強い懸念を表明していたことを知っていたので、その事務局では原油価格の安定に貢献するような仕事が出来るとはなかったかと思っていた。

経済産業省から誘いがあった時には二つ返事で応募することにした。ただ、原則は公募だったから、厳しい審査、加盟国間の折衝を経てエネルギー局長に納まるまではそれなりの紆余曲折があった。

また、国際石油ガスフォーラムは、二〇〇〇年にリヤドで開催された第七回会合以来石油市場の透明性向上に向けて国際石油需給統計の整備を進めることを明らかにしていた。この統計の整備が事務局の主要業務の一つとなっていたので、石油協会の仕事で国際需給統計に親しみ、その限界を痛感していた植木には是非取り組んでみたい仕事だった。

植木はこれまで取り組んできたことの総仕上げになると考えていた。

必ず、より速く、より正確な世界石油需給統計を世界に公

表してやる

日本を発つ時、植木の心はそうはやった。

治安の悪化が伝えられていたサウジアラビアに敢えて赴任した背景にはそのようなわけがあった。

ただ、サウジが二度目の植木にはサウジの治安能力にはそれなりの信頼感を持っていてサウジをイラクと混同して心配する知人などには辟易としていた。

植木はエネルギー関係の国際機関に勤務する日本人として日本大使館の経済班とは行き来があつたがリヤドに住む他の日本人とは距離を置いて生活していた。

二年間という短い任期だったから時間がもったい無かつたのだ。レジデンスにいても、時間があれば国際石油需給価格動向を分析していたかった。その意味では治安が悪く外出を極力避けなければならぬというのは好都合だった。

しかし、偶然、同じレジデンスの同じフロアに住むことと

なつた池波慎太郎とは同じ石油関係者で話もあつたことから親しく付き合うことになった。

慎太郎は商社マンではあつたが、もと外交官でサウジ赴任が二度目と植木と共通するところも多かった。

慎太郎は明るくひょうきんな性格でレジデンスの従業員からもだれ彼となく慕われていた。彼の行くところ必ず笑いが起こり、セキュリティを考えていつも緊張して過ごしていた植木の心は和んだ。

人見知りをする植木だったが、慎太郎のそんなところが植木の心を強く惹き付けた。

植木は慎太郎と初めて会つた頃のことを思い出していた。

慎太郎は学歴を聞かれると「京大中退です」などと言っていたが、日本大使館の林公使に聞くとところによれば、それは、大学三年の時に外交官試験に受かってしまったので卒業を待たずに外務省に入ったまでのことのようにだった。

植木は、そんな超エリートの慎太郎が何故外務省を辞め、そしてこのサウジに二度までも、しかもこんな危険な時に赴任することになったのだろうかと思味深々だった。

「ところで、池波さん。どうしてこのサウジアラビアに二度までも滞在することになったんですか」

レジデンスに近い行き付けの中華料理店「来来飯店」で昼食をとりながら植木は池波に聞いてみた。

慎太郎はちよつと間を置いて笑いながら応えた。

「それはですね。サウジが好きだからですよ」

そのあまりに率直な答えに呆気にとられ、植木はすぐにはサウジのどこが好きなのかなどと質問することが出来なかつたくらいだった。

「植木さん。期待された答えになっていないんで呆れたんじゃないですか。それに僕のようにサウジが好きなどという人は滅多にいませんからね。しかもよりによってこんな危険な時にリヤドにやってくるんですから……」

慎太郎は植木の心の底を完全に読み取っていた。

「まあ、そうですね」

植木は、曖昧にそう答えてお茶を濁すとサウジ・シャンペンを一口飲んだ。

サウジシャンペンとは、シャンペンと言っても名ばかりで、飲酒厳禁のサウジではアルコールを一滴も含んではない。単にリングジューズを炭酸水で割っただけのものだった。恐らく酒好きの洒落ものが悔し紛れに付けた名前に違いない。しかし、飲んでみればおつなもので会食などには好んで飲まれていた。

“まあ”ですか。植木さんは優しいですね。“酒も飲めない、美味しい中華料理店で酢豚も食べられない、そんなサウジのどこが好きなんですか”なんて、聞いて来ないんですから」



「じゃあ、お聞きしましょう。一体、どうしてそんなサウジが好きなんですか」

「やれやれ、“じゃあ”ですか。植木さんには敵いませんよ」

二人は、いつものように軽口を叩き合った。

「実は、最初の赴任の時に忘れられない思い出がありました……」

「まさか忘れられない娘というわけではないんでしょうね」

「勘弁して下さいよ、植木さん。ここは男女席を同じくせずのサウジですから、そんなことはありえないじゃないですか」

そして、慎太郎は、ちよつとためらったようだったが、植木の顔をじつと見つめながら神妙に話を始めた。

「サウジの人間性、宗教性について真剣に考えさせられるよ  
うなちよつとしたことがあったんです」

慎太郎は真剣な眼差しになっていた。植木も真剣になり軽口は控えた。

「ほく、商社にお勤めの池波さんからそんなお話が出るとは思ってもいませんでした。ここはイスラムの盟主サウジですから大変興味がありますね。是非とも聞きたいですね」

「私も、思ってもいなかった“神問答”を私のカウンターパートだった石油相第一秘書とすることになったのです」

“神問答”ですか、ますます興味が湧いてきました」

「植木さんもご存知の通り、サウジ人は良く“インシュアラ”と言いますよね」

「そうですね。“神の思し召し”という意味ですね。神を敬う良い言葉ですが、アラブ人には便利な言葉のようですね。時に言い訳、不可抗力、都合の良い責任回避として使われたりすることもありますね」

「私のカウンターパートだった当事のナセル石油相の第一秘書、アブダラーもそうでした。面会の約束を取り付けると必ず最後に微笑みながらインシュアラと言つのです。あれは嫌だったですね。折角取り付けた約束が頼りなく思えてき

てしまうんですよ」

植木は前回赴任時に何度も同じような経験をしていたので慎太郎の悩みは良く分かった。

「実際、よく待たされました。約束の時間に行っても居たところがありませんでした。いつも三〇分程度は待ちましたね。それでも僕は根気の良い方でしたからいつも気長に待ちましたよ」

「あれは、暫くそんな状態が続いた後のことでした。私が用件を終えて大使館に帰ろうとしたらアブダラーがいきなり、  
“君は神を信じますか”と聞いて来たのです」

慎太郎は感慨深げだった。

「ほう、石油相の秘書官が・・・オフィスですか・・・」

植木は仕事で役所を訪れたことは何度もあったが、そんな質問を受けたことは一度も無かった。

「そうなんですよ。私は最初自分の耳を疑いました。仕事で行っているのですからそんな質問を受けるとは夢にも思っ

ていなかったのです」

「そうですね。彼等はモスLEMですからそんな質問があつてもおかしくないのかもしれませんが仕事の時にする質問ではありませんよね。その秘書官は一体何を考えていたのでしょうか」

植木は次第に慎太郎の話にのめりこんで行った。

「一瞬、当たり障りの無いように“信じています”とか、“仏様を信仰しています”とか応えようかとも思つたのですが私は思い切つて正直に“信じていません”と応えました」

それを聞いて植木は驚いた。イスラム宗主国のサウジでは“神を信じていない”というのはタブー（禁句）だった。慎太郎がそれを知らない筈はない。以降相手にされなくなつても仕方が無いほどのことだ。

「アブダラーは一瞬目を見張り、それから哀れそうに私を見つめていました。きつと驚いていたのでしょう」

慎太郎はありありとその哀れみを浮かべた表情を思い出

していたようだった。

「そして、一呼吸おいてから“それでは何を信じているのですか”と聞いてきたのです」

植木には意外な展開だった。

「秘書官は“信じています”という答えを期待していたのでしようね。普通はそこで話は終わりです。余程真面目な人なのでしょう。で、今度はどう応えたのですか」

「面食らいました。一体何を自分は信じているのだろうかなどと考えさせられてしまいました。“愛を信じています”などと応えることも考えましたが、ちょっと気恥ずかしかったしその時は実感が無かったものですから一般論として“日本人は科学を信じています”と応えてしまったのです」

「すると、アブダラーは、にこやかな顔で“科学は信じるものではなく学ぶものです”と言ったのです・・・」

植木は慎太郎とアブダラーの真剣なやりとりを聞いて慎太郎がサウジに惹かれて行ったわけが判ったような気がした。

「植木さん、そんなやりとりがあつてからのことです。いつも私を待たせていたアブダラーがきちんと約束通りに部屋に居るようになったのです。狐につままれたような気がしました」、

「私にはアブダラーが私を長い間待たし続けることで私を試していたように思えて仕方ありませんでした。そこにサウジ人の警戒心、用意周到さを感じました。この件でサウジに一層興味が掻き立てられサウジが好きになったのです」

植木は軽い気持ちでサウジが好きなわけを聞いただけだったが思わぬ方向に話が行ってしまった。慎太郎にはそんな忘れられない思い出があつたのか・・・

植木はますます慎太郎に興味を抱いていった。

確かに植木は原油価格の安定を標榜してこのリヤドにやってきた。

自分はそれに邁進するつもりだったが、それは広く正確に認識されているのだろうかと気にもなっていた。正確な認識が世界に広がらなければ価格安定の実現は難しい。

そう思い悩んでいた時、たまたま慎太郎に出会った。

石油関係の仕事に身を置いている慎太郎は、一体、価格の安定を望んでいるのだろうか、そもそも、現在の高原油価格を不当、不公正と考えているのだろうか、そして、どこまで国際的な石油需給、石油価格の動きに興味を持ち、それをどの程度まで正確に把握しているのだろうか、また、それをどう考えているのだろうか、などと、植木には慎太郎に聞いてみたいことが次々と浮かんで来た。

また、植木は相変わらず現在の高価格の主因は米国のテロとの対決、その延長線上のイラク問題などのジオポリティックス(地政学)要因と信じていた。

その一つのキーは中東、イスラム問題にある。

たまたま、慎太郎がその両者に本能的に、あるいは根源的に出くわし興味を持っていることも知った。

植木は大学卒業以来、石油協会で平々凡々とサラリーマン生活を送ってきたので、外務省を飛び出し商社という全くの別世界でたくましく生きている慎太郎の生き方を羨望を持って眺めていた。

これから彼はこのイスラム世界でどのようにして仕事を進めようとしているのだろうかなどと様々に思いを巡らせていた。

そんな慎太郎とたまたま同じレジデンス、しかも同じ階に住むことになった。植木は不思議な縁を感じていた。

「植木さん、済みません。こんなお話で・・・」

植木は慎太郎の声で我に返った。

「池波さん、良く分かりましたよ。興味深く聞かせて貰いました。これからも時間を作ってお話を聞かせて下さい。今度は石油問題について話しませんか」

植木は率直に頼んでみた。

それもあって、その後、慎太郎、植木、イブラヒムの三人



の石油談義が始まったのだった。

その石油談義の席で植木は一貫して高エネルギー価格に対する懸念を訴えてきたが一抹の不安もあつた。

二〇〇四年五月にオランダのアムステルダムで開催されたエネルギー閣僚級会合の第九回国際石油ガスフォーラムが高エネルギー価格を憂慮する決議を採択し、市場の透明性を高めることがその有力な方策の一つと訴えたが、それさえもどこまで浸透したのかは分からない。事務局がこれから進めようとしている国際石油需給統計の整備は市場の透明性向上に貢献することは間違いないだろうが、その重要性がどこまで認識されているのかは不明だ。そして、それが原油価格の安定に本当に役に立つのだろうか。

最近のその石油談義の席で植木とイブラヒムは、突然、慎太郎から石油談義の中断の申し出を受けた。

お陰で、二人は慎太郎の仕事が大きく動き出していること

を知った。

「明日東京本社の石渡専務が特別プロジェクト関連でリヤドにやってきますのでこれから忙しくなります。石油談義は石渡がリヤドを離れてから再開ということ为宜しいですか」「勿論、それで結構です」

植木はそう応えながら、こんな治安の悪い時に東京から専務がやってくるのを不思議に思っていた。

余程のことがあるに違いない。

リヤドの治安は本当に悪化していた。

六月二日にも、リヤド郊外で米国人の乗った車二台がテロリストの乗った車から銃撃された。二台の車は伴ってコンパウンドを出発したが、高速に入ったところで追ってきた車から狙撃された。一人の米国人は軽傷を負ったものの、幸い二台の車は直ぐにコンパウンドに逃げ帰ることが出来た。

五月二二日のドイツ人射殺事件に続くこの車からのテロ攻撃の発生で、リヤドではテロに対する脅威が一段と高まっ

ていた。

更に、六月六日にはリヤドでイギリス人ジャーナリスト二人が襲われ一人が死亡、一人が重傷を負った。

昨日は国家警備隊の訓練を請け負っていた米国人が自宅でテロリストに襲われ頭部に九発の弾丸を打ち込まれ惨殺されたばかりだ。

この殺害の様子はテロリストによりビデオ撮影されその映像がテロリストのウェブサイトを通じて配信された。

「それにしても、こんな治安の悪い時に東京からそんな偉い人が良くやってきてくれますね。池波さんは大変でしょうが有難いことですね」

「そうですね。石渡専務は次期社長と見られている人ですから特に有難いことと思っています。サウジ側もそれを高く評価してくれています」

そして、六月一〇日の夜、慎太郎は石渡を出迎えるためキング・ハリド国際空港に向かったのだった。